

CHOPIN 新連載 深井尚子 『尚子先生の魔法のピアノ上達法』

第1回 ピアニストはアスリート？

今から20年ほど前に、ロンドンに魔法のように弾けるようになる方法を教えてくれる先生がいるという情報があり、当時、私はすぐにその先生の門を叩きました。その教えは、ピアニストとしての私の演奏の第2の基礎となっています。その魅力的な演奏法を、現在、大学でピアノ専攻の学生たちにも伝えていますが、多くの学生が確実に上達しています。この魔法のピアノ上達法は、演奏者が音楽の解釈も分析も行ない、かなり練習した状況のときに発揮されるものです。つまり、演奏者が「こういう音楽を表現したい！」という明確なヴィジョンを持った時、その表現を実現できる方法というわけです。

しかし、表現って、難しいですよ。ルバートをたくさんしたから音楽的というわけではありませんし、均等に音階が弾けたからといって、よい演奏とは限りません。「よい音楽」、「よい演奏」ってどんなことをいうのでしょうか。ここで、スポーツの分野に目を向けてみましょう。スポーツの分野では、明確に勝敗があり、はっきりとした規則の中で成績を競います。フィギュアスケートや体操競技など、芸術的な面を多分に持つ競技も、転倒や回転が不足するなどの項目によって、減点されて行き、最も減点の少ない選手が優勝します。スポーツの分野では、評価がとてもはっきりしていますよね。それに対して、クラシック音楽をはじめとする芸術分野では、明確ではありません。クレッシェンドやデミュニエンドの幅も、強弱の幅も演奏者によってずいぶん違いますね。テンポもアレグロは、速く、アンダンテは歩く速さで、といっても、やはり幅があります。拍子はどうでしょう。4/4拍子の二拍目など、作曲家が弱拍に sf やくをつけていた時、その拍子はどうなるのでしょうか。今、強弱（デュナーミク）、テンポ、拍子について、あらためて見つめなおしてみました。強弱では、響きがとても重要な要素です。テンポは、どんなにルバートやアゴーギクをしても元のテンポにきちんと戻れることが大切です。拍子も、sf やくに惑わされることなく、基本的な拍子感は、保たなければなりません。

さて、これらの要素をクラシック音楽の基本にのっかって実現するためには、スポーツアスリートのような、身体の運動の仕組みを意識することが大切になります。「身体の仕組みの知識」→「よい音楽の実現」という考え方ではなく、「よい音楽の実現」→「身体のコンディションを整える」という方向から、お話をしたいと思います。たとえば、オクターヴの連続で疲れてしまうとせず、まず、この連続は、音楽的にどう表現するべきかと考えると、オクターヴに広げた指のことだけではなく、手首の柔軟性をどの拍で使うのか、腕の移動はどのタイミングで行なうのかが見えてきて、突然、弾けるようになります。たとえば、リストのパガニーニエチュードの第2番の18小節目など、どうでしょう。ここでは、身体の重心を腰から下に向けて、背筋を安定させます。左右のオクターヴを均等ではなく、右手を軸に左手を右手に付随させると、リストが考える華やかできらびやかな響きを実現できます。次回からは、私自身が弾けなかった部分を例に、詳しくお話していきます。よい演奏の実現は、実はスポーツアスリートととても似たところがあるのです。